

社会的文脈における自尊感情の変動因に関する研究

——状態・特性自尊感情の連関メカニズムの理解——

中嶋夕湖・下斗米 淳・岡本祐子

Understanding the link between state and trait aspects of self-esteem in a social context

Yuko Nakajima, Atsushi Shimotomai, and Yuko Okamoto

As people experience various events in everyday life, their assessment of emotion and of self-changes. In recent years, research has increasingly focused on individual fluctuation of short-term emotions as a means of explaining changes in self-esteem. In this study, an association between trait self-esteem (TSE), i.e., self-esteem as a characteristic, and state self-esteem (SSE), the type of self-esteem that is alterable by daily events were examined. Every day for one week, 61 students (23 male) from three universities were surveyed. Data were analyzed by hierarchical linear and nonlinear modeling, and revealed a positive association between SSE and TSE that suggests TSE is a general evaluation and SSE varies according to specific experiences. Individual differences were also observed such that the SSE and TSE relationship was affected by interpersonal dislocation: those who had experienced interpersonal dislocation, compared with those who had not, demonstrated a temporary intensification of both types of self-esteem.

キーワード: trait self-esteem, state self-esteem, variation, interpersonal dislocation

問 題

はじめに

自尊感情は、人間の行動や認知に影響を及ぼすとされ、古くから盛んに議論や実証的な研究が行われてきた。Rosenberg (1965) によれば、自尊感情とは自己への尊重や価値を評価する程度のことであると定義している。また、石田他 (2008) によれば、自尊感情とは自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことであると言及している。つまり、自尊感情とは、自己の能力や価値を評価する程度であるといえる。

自尊感情と他の変数との関連

自尊感情を取り扱う研究や議論において、多くの場合、自尊感情の高低の次元が取り上げられてきた。従来の研究では、高自尊感情は個人の精神的健康によって適応的であり、低自尊感情は不適応的であることが示唆されている (遠藤, 1992 ; 遠藤, 1999 ; Rosenberg, 1965)。しかし、原田 (2008) によれば、自尊

感情が高い者は、自己の欠点や失敗から学ぶことが出来ず (Dweck, 1986), 自尊感情が傷ついたときに他者に怒りや敵意を示す (Baumeister, Smart, & Boden, 1996) など, 高自尊感情の否定的側面を指摘している。すなわち, 自尊感情は必ずしも高い方が適応的であるとは限らないことを示唆していると考えられる。そのため, 高低の次元だけではなく自尊感情の変動のしやすさの次元も含めて, 議論を行う必要があると考えられる。そこで本研究では, 自尊感情の変動性を考慮して検討する。

自尊感情の変動性

「他者」や「出来事」に影響を受ける自尊感情の変動性の次元を議論する上で, 比較的安定した特性的な自尊感情と変動しやすい状態的な自尊感情とに区別する立場がある (榎本・稲本・松田・梅垣, 2001)。阿部・今野 (2007) は, 特性自尊感情は“時間や状況を通した自分に対して感じる全体的な評価であり, 比較的安定しているもの” (阿部・今野, 2007, p.37) と定義している。一方, 状態自尊感情は“現時点の自分に対して感じる全体的な評価であり, 日常生活の出来事などに対応して変動するもの” (阿部・今野, 2007, p.37) と定義している。そこで, 本研究において, 特性自尊感情は, 「時間や状況を通した自分に対して感じる全体的な評価であり, 比較的安定しているもの」と定義する。また, 状態自尊感情は, 「対人文脈や日常生活の出来事によって揺れ動き変動するもの」と定義する。

ところで, 特性的な自尊感情は比較的安定したものとされており (阿部・今野, 2007; 榎本他, 2001), 個人の全体的な評価である特性的な自尊感情の変動は, 臨床的な問題が生じやすいと考えられる。遠藤 (1999) によれば, 個人が望ましい属性を自覚的にとらえ評価した結果, 「私は価値ある人間だ」という安定的な自尊感情が自己の内側に生じると言及している。しかし, 特性的な自尊感情が変動する場合, 「私は価値ある人間だ」という評価が揺れ動くこととなり, 自己存在やアイデンティティの危機など臨床的な問題につながると考えられる。そのため, 個人内での特性的な自尊感情の変化に関連する要因について, 検討する必要があると考えられる。竹田・川本・渡邊・サトウ (2011) は, 評価的フィードバックの影響を受けて状態的な自尊感情は形成されるが, 形成される状態的な自尊感情の影響を受けて, 特性的な自尊感情の高低は変化しうると言及している。すなわち, 状態的な自尊感情が特性的な自尊感情の変化と関連している可能性が考えられる。しかし, 竹田他 (2011) の文献検討による研究では, 十分な示唆が得られなかった。そのため, 本研究では, 実際の反復測定データを用いて, 特性的な自尊感情と状態的な自尊感情との個人内での関連を検討することとする。

出来事の調整効果

対人文脈という関係性の視点を導入した代表的な自尊感情研究に, Solomon, Greenberg, & Pyszczynski (1991) による存在脅威管理理論がある。存在脅威管理理論とは, 死の不可避性の認識が人間に実存的な脅威を引き起こすとし, 自尊心もまた死への脅威を緩和するという防衛的な機能を持っているという理論である (Solomon et al., 1991)。また, Kowalski & Leary (1995) によるソシオメーター理論がある。ソシオメーター理論の基本前提として, 「自尊心とは, 自分と他者との関係を監視する心理的システムである」 (Kowalski, & Leary, 1995, p.232) と考えられている。Kowalski et al. (1995) は, 集団生活を送る人間社会において, 他者から受け入れられているのか排除されているのかを確認することが生きるためには必要不可欠であり, 他者からの受容あるいは拒絶をモニターする「自尊心」というシステムが重要であると言及している。つまり,

他者からの拒絶や対人ストレスイベントは、社会的な生物である人間にとって脅威的な出来事であるといえる。岡田 (2012) も、日常の受容・拒絶経験と自尊心、攻撃性との関連を検討したところ、日常の拒絶経験が多いほど、自尊心が低く、短気や敵意が高いことを明らかにした。

多くの対人ストレスイベントが存在する中で、橋本 (1997) は、大学生における対人ストレスイベント分類の試みによって、対人葛藤、対人劣等、対人摩耗という 3 種類の対人ストレスイベントを見出した。橋本 (2000) は、社会の規範からの逸脱である対人葛藤や、他者と対等にコミュニケーションが取れない事態である対人劣等は、社会的スキルの欠如から生じると述べている。しかし、橋本 (2000) によれば、対人摩耗は、対人関係を円滑に進めようとする当事者の意図に反して、気疲れを感じる事態であると言及している。つまり、対人摩耗は、個人が社会的スキルを発揮しようとする意図を持ち、表面的には問題のない相互作用を実現・維持しているのだが、内心では気疲れを感じる事態であるといえる (橋本, 2000)。また、橋本 (1997) は、対人葛藤や対人劣等を大きなネガティブイベント、対人摩耗を日常ネガティブイベントと仮定し、対人葛藤や対人劣等によって対人摩耗が引き起こされ、その対人摩耗がストレス反応の直接因となると考察している。以上のソシオメーター理論や存在脅威管理理論より、対人摩耗経験のある者は、他者からの受容の測定器である自尊感情が変動しやすく、状態的な自尊感情の変動が特性的な自尊感情の変動にも影響しやすいのではないかと予測される。そこで、本研究では、全体的な自己の評価であると定義する特性自尊感情と、対人文脈の中で変動すると定義する状態自尊感情は、日常的なネガティブイベントである対人摩耗とどのような関連があるのかを検討する。

ところで、我々は、日常生活の中で多くの成功体験や失敗体験に直面している。池田・三沢によれば、失敗は、自己の学習や成長につながる (Sitkin, 1992) ポジティブな効果をもたらす可能性を持つ一方で、動機づけの低下 (Dweck & Reppucci, 1973)、無力感 (Seligman, 1972)、あるいは抑うつ症状 (Abramson, Seligman, & Teasdale, 1978) などネガティブな効果を引き起こす危険性も同時に含んでいると言及している。阿部・今野 (2007) は、肯定的あるいは否定的な評価を与え、課題成功—失敗に伴って状態自尊感情の得点に変化するかどうかを検討した。その結果、状態自尊感情は課題達成の成功によって上昇し、失敗によって低下する傾向にあることを明らかにした。また、李・山内 (2000) は、能力テストに失敗するという経験後に、自尊感情や情動にどのような影響を与えるかを検討した。その結果、失敗経験後、失敗恐怖が高くなるほど、自尊感情が低くなり、自尊感情が低いほど、恥などのネガティブな感情が高くなるということが示された。

以上より、失敗経験は、個人内の出来事であり、対人摩耗と比較して対人的な文脈での出来事ではないと考えられる。そのため、状態的な自尊感情が変動しても、特性的な自尊感情の変動には影響しないのではないかと考えられる。すなわち、ソシオメーター理論からみて、自尊感情は他者からの受容の測定器であることを考えると、対人的なストレスイベントでは特性的な自尊感情も変動しやすいと考えられるが、課題のミスなどの失敗経験では特性的な自尊感情は変動しないのではないかと予測される。そこで、本研究では、個人内の出来事であると考えられる失敗経験と、特性・状態自尊感情との関連を検討する。

目 的

本研究では、従来の研究に沿った特性としてある個人の自尊感情に、状況や環境に影響される関係性と

いう視点を取り入れて検討していく。検討を行う上で、自尊感情は、「時間や状況を通した自分に対して感じる全体的な評価であり、比較的安定しているもの」と定義する特性自尊感情（以下、TSEと記す）と、「対人文脈や日常生活の出来事によって揺れ動き変動しているもの」と定義する状態自尊感情（以下、SSEと記す）の2つに区別する。

TSEとSSEの関連を検討する上で、以下の3点の仮説検証を目的とする。

仮説1) 状態的な自尊感情が特性的な自尊感情の変化と関連している可能性が予測される。それゆえ、TSEとSSEは、個人内で関連する。

仮説2) 対人摩擦の経験は、SSEを変動しやすく、SSEの変動に伴ってTSEの変動にも影響しやすいと予測される。それゆえ、対人摩擦経験のある者は、TSEとSSEの関連が強くなる。

仮説3) 失敗経験は、対人的な出来事ではないため、SSEが変動しても、TSEの変動には影響しないのではないかと予測される。それゆえ、失敗経験のある者は、TSEとSSEの関連が弱くなる。

仮説を検討するために、より多くの反復測定データを収集する必要がある。さらに、TSEとSSEの関連の個人差に及ぼす出来事の影響を検討するため、影響を及ぼす出来事を収集する必要がある。このような個人内レベルと個人間レベルの関連を考慮した検討を行うための分析手法として、階層的線形モデル（HLM）を行うことにした（Raudenbush & Bryk, 2002）。我が国の心理学研究では、階層的線形モデルを用いた検討はまだ多くなされていない（大谷・中谷・伊藤・岡田, 2012）。このような比較的新しい手法を用い、TSEとSSEとの関連を検討することは学術的研究の促進という意味で重要な意義を持つと考えられる。

方 法

手続き

調査方法 本研究では、特性・SSE の変動について、阿部ら（2007）の手法を用いて測定した。調査者は、大学の講義で研究目的の説明と参加依頼を行った。7日間、参加者には18時から翌2時までに質問紙の回答を求めた7日間の日誌法による手法は、参加者への負担が大きいことから、本研究では、市村（2012）の自尊感情の変動性の測定方法の手法に基づき、独立行政法人メディア教育開発センターのREAS（リアルタイム評価支援システム）を使用した。回答方法は、PC、携帯によるWeb機能を用いた。

分析方法 まず、尺度の内的一貫性を検討するために、主成分分析を行った。次に、各変数の記述等軽量を算出した。そして、TSEとSSEの個人内における関連の検討、および、両者の関連を調整する要因を検討するために、階層的線形モデリングを行った。まず、1週間のTSEとSSEとの個人内の関連を検討するために、エピソード変数を投入しない unconditional model を実行した。次に、TSEとSSEとの関連の個人間差を説明するために、エピソード変数を投入した conditional model を実行した。

調査対象者 A大学・B大学181名（男性74名、女性107名）が調査に参加した。回答に不備があった、もしくは途中で中断した120名は分析から除外し、分析対象となったのは61名（男性23名、女性38名）であった。男性の平均年齢は20.52歳（SD = 2.32）、女性の平均年齢は21.55歳（SD = 3.76）だった。

調査票の構成

特性的な自尊感情の尺度 TSEの測度として、日本語版自尊心尺度（山本・松井・山成, 1982）を使用

し、1週間毎日回答を求めた。当該尺度は Rosenberg の自尊心尺度の日本語版であり、10項目で構成されている。本研究では、当該尺度を TSE 尺度とする。教示は、「普段のあなたについて、以下に挙げる文章がどれくらいあてはまるでしょうか。」とした。調査参加者は、「1 (あてはまらない) ～5 (あてはまる)」の5件法で回答を求めた。得点が高いほど、TSE が高いことが示される。

状態自尊感情尺度 SSE の尺度として、状態自尊感情尺度 (阿部ら, 2008) を使用し、1週間毎日回答を求めた。当該尺度は Rosenberg の自尊心尺度の日本語版を参考にして作成されたものであり、10項目で構成されている。教示は、「あなたが、「いま」この瞬間で感じているのは、以下に挙げる文章がどれくらいあてはまるでしょうか。」とした。調査参加者は、「1 (あてはまらない) ～5 (あてはまる)」の5件法で回答を求めた。得点が高いほど、SSE が高いことが示される。

出来事に関する自由記述 調査参加者に、その日一日の中で印象に残った出来事に関する事柄を自由記述で回答を求めた。教示は、「あなたが、社会生活 (学校、サークル、バイト、家など) を送る中で、今日一日自分の気持ちに何か変化や影響を感じる事が出来た出来事をお聞きました。さらにその出来事に関して、詳しく教えてください。」とした。出来事に関する質問は、「その出来事に関わる相手は誰ですか。」、「どこで、どんな場面で起きた出来事ですか。」、「どんな気持ちになりましたか。」、「その気持ちになった理由を教えてください。」、「その出来事によって、あなた自身への評価や考え、心がけや態度など、詳細な変化や影響で結構ですが、なにか変化や影響はありましたか。具体的に詳しく教えてください。」とした。

結 果

尺度の内的一貫性

特性自尊感情尺度 尺度の内的一貫性を検証するために、当該尺度 10項目で主成分分析を行った。その結果、1項目の「自分をもっと尊敬できるようになりたいと感じる (.20)」を除く9項目が第1主成分に高い負荷量を示し、同項目を分析から除外して再度分析を行ったところ、全ての項目が高い負荷を示した (Table 1)。

状態自尊感情尺度 尺度の内的一貫性を検証するために、当該尺度 10項目で主成分分析を行った。その結果、1項目の「いま、自分をもっと尊敬できるようになりたいと感じる (.17)」を除く9項目が第1主成分に高い負荷量を示し、同項目を分析から除外して再度分析を行ったところ、全ての項目が高い負荷を示した (Table 1)。

Table 1
 自尊感情尺度と状態自尊感情尺度の主成分分析 ($N = 61$)

自尊感情尺度 (TSE)		<i>M</i>	<i>SD</i>	第1主成分負荷量
項目1	少なくとも人並みには価値のある人間である	24.39	5.57	.88
項目2	色々な良い素質を持っている	21.13	6.39	.78
項目3	敗北者だと思ふことがある	23.75	7.16	.64
項目4	物事を人並みには、上手くやれる	23.08	5.67	.84
項目5	自分には自慢できるところがあまりない	19.62	6.63	.83
項目6	自分に対して肯定的である	21.46	6.66	.73
項目7	だいたいにおいて、自分に満足している	20.28	6.67	.81
項目8	自分はまったくだめな人間だと思ふことがある	20.39	7.7	.78
項目9	何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ	22.72	7.48	.91
状態自尊感情尺度 (SSE)		<i>M</i>	<i>SD</i>	第1主成分負荷量
項目1	いま、少なくとも人並みには価値のある人間であると感じる	23.93	5.59	.82
項目2	いま、色々な良い素質があると感じる	20.13	6.27	.78
項目3	いま、敗北者だと感じる	26.41	6.53	.77
項目4	いま、物事を人並みには、上手くやれると感じる	21.84	5.56	.83
項目5	いま、自分には自慢できるところがあまりないと感じる	21.72	7.1	.86
項目6	いま、自分に対して肯定的であると感じる	22.30	5.82	.80
項目7	いま、自分にはほぼ満足を感じる	20.07	6.09	.75
項目8	いま、自分はまったくだめな人間だと感じる	23.67	6.75	.87
項目9	いま、自分は役に立たない人間だと感じる	24.92	6.66	.96

記述的統計

中間ら (2007) に則って、自尊感情については、逆転項目処理を行った後で、7日間のTSE合計得点を、その日のTSE得点とした。また、7日間のSSE合計得点を、その日のSSE得点とした。TSEとSSEの尺度得点の記述統計量をTable 2に示す。

Table 2
 7日間の自尊感情尺度の記述統計量 ($N = 61$)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
自尊感情尺度 (TSE)	196.84	47.9	.93
状態自尊感情 (SSE)	204.98	46.6	.94

出来事の種類

参加者 61 名から 402 件の回答が得られた自由記述による出来事を、KJ 法 (川喜田, 1967) に則って、臨床心理学を専攻する大学院生 5 名で分類した (Table 3)。分類名は【 】で示した。

①402 件の出来事で、類似していると考えられたものをまとめ、カテゴリー化を行った。例えば、「バイト先でコップを割りまくったり他にも色々やらかした」という出来事には、「ミスをした」というカテゴリー名をつけた (サブカテゴリー化・36 のサブカテゴリー)。

②サブカテゴリー間で関連のあると考えられるものは、カテゴリー化を繰り返した (カテゴリー化・11 のカテゴリー)。これらをまとめて、Table 3 に示した。本研究では、【対人摩擦 ($n = 15$)】と【失敗経験 ($n = 59$)】をエピソード変数として、検討を行った。

【対人摩擦】：対人関係を円滑に進めようとする当事者の意図に反して、気疲れを感じる事態を含むカテゴリーである。このカテゴリーの中には、「理不尽な経験 ($n = 6$)」、「注意された ($n = 5$)」、「親と喧嘩した ($n = 2$)」の 3 つのカテゴリーが存在した。

【失敗経験】：日常生活の中で、ヒューマンエラーやミスなどを生じた事態を含むカテゴリーである。このカテゴリーの中には、「ミスした ($n = 18$)」、「出来なかった ($n = 20$)」、「上手くいかなかった ($n = 12$)」、「体調崩した ($n = 8$)」の 4 つのカテゴリーが存在した。

Table 3
KJ法による出来事の種類 ($N = 61$)

カテゴリー	サブカテゴリー	エピソード例	n
不快体験 ($n = 12$)	劣等感	他人と比較して、自分は劣っていると感じてしまった。	3
	焦燥感	院試の勉強をして焦りを感じた。	7
	嫌味を言われた	友だちに嫌味を言われた。	2
怠惰体験 ($n = 24$)	サボった	授業をさぼった。	4
	寝坊をした	授業に寝坊した。	6
	居眠り	授業で、あてられることがわかっていたので寝ないようにしようと思っていたけれど、寝かけてしまった。	8
	何もしなかった	1日ゴロゴロしていて、何もしなかった。	6
失敗体験 ($n = 59$)	体調崩した	急に体調が悪くなった。	8
	出来なかった	予定していたことが出来なかった。	21
	ミスした	バイト先でコップを割りまくったり他にも色々やらかした。	18
	上手くいかなかった	ゼミのプレゼンが上手くいかなかった。	12
対人摩擦 ($n = 15$)	理不尽な体験	知らない人から怒られた。	6
	親と喧嘩をした	親とケンカした。	3
	注意された	先生に怒られた。	6
対人援助 ($n = 11$)	してあげた	友だちに友だちが休んでしまった時のノートを見せてあげた。	4
	感謝された	大学院の授業の後、「意見が一番参考になった」と友だちに感謝された。	7
他者評価 ($n = 21$)	誉められた	意見発表が上手い、事例への着眼点が良いと誉められた。	12
	肯定的・好意的評価	人から美しいといわれた。	9

Table 3
KJ法による出来事の種類 (続き) (N = 61)

カテゴリー	サブカテゴリー	エピソード例	n
コミュニケーション (n = 39)	会話をした	久々に学校の友達メンバー全員でゆっくり話せた。	31
	話して気づきを得た	何事もポジティブに考える友人と話したとき、自分も見習うべきだと感じた。	8
被対人援助 (n = 38)	人から頼られた	友人に頼られた。	4
	誘われた	友人に食事に誘ってもらった。	3
	連絡がきた	中学のときの友達から久しぶりに連絡がきた。	6
	親切にしてもらった	体調が悪いのを心配してもらった。	16
成功体験 (n = 52)	物をもらった	実家からプレゼントが届いた。	9
	出来た	自分の係を全うできた。	27
	物事が進展した	難しい課題が半分終わった。	6
	勝った	部活の試合でライバル校に勝てた。	4
活動 (n = 128)	終了した	いやな授業が無事に終わった。	15
	集団での活動	スポ少の指導に行つて、子どもたちが普段よりも積極的に練習していた。	6
	単独の作業	研究室にこもつて、ゼミ資料をずっとつくっていた。	4
	人と会った	恋人と会った。	4
	遊んだ	同じ学部の友人たちと授業がないにもかかわらず集まって遊んだ。	4
	出かけた	高校の友人たちと食事に行った。	33
	イベントに参加した	ユニセフの募金活動に参加した。	17
未分類	行った	祖母の誕生日プレゼントを買った。	55
		天気がいい。	8

TSE と SSE の個人内における関連

SSE, およびエピソードが、TSE に及ぼす影響を検討するため、階層的線形モデル (Hierarchical Linear Models, 以下 HLM と記す) を行つた。まず、TSE 得点と SSE 得点の個人内の関連を検討するため、time1~time7 の SSE が、TSE 得点に及ぼす影響を表す指標である、固定効果を算出した。同時に、time1~time7 の SSE 得点が TSE 得点に及ぼす影響に、有意な個人差があるかを表す指標であるランダム効果を算出した。この分析を、エピソード変数 (【対人摩擦】・【失敗経験】) を投入しないモデル (unconditional model) として検討を行い、SSE 得点は個人毎に、7 回の測定における平均値を用いて中心化 (group mean centering) した。

個人によって SSE 得点と TSE 得点との関連に違いがあるかを検討するため、以下のモデルを設定した。2 つのレベルは互いにリンクしている。

< レベル 1 (個人内レベル) >

$$Y_{ij} = \beta_{0j} + \beta_{1j}X_{ij} + e_{ij} \quad e_{ij} \sim N(0, \sigma^2) \quad (1)$$

< レベル 2 (個人間レベル) >

$$\beta_{0j} = \gamma_{00} + \nu_{0j}, \quad \beta_{1j} = \gamma_{10} + \nu_{1j} \quad (2)$$

$$\begin{pmatrix} v_{0j} \\ v_{1j} \end{pmatrix} \sim N \left(\begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix}, \begin{pmatrix} \tau_{00} & \tau_{01} \\ \tau_{10} & \tau_{11} \end{pmatrix} \right) \quad (3)$$

ここで、 i と j は、それぞれ、 i 週目の測定時点と、 j 番目の参加者を示している。すなわち、式 (1) における Y_{ij} は、 i 週目の測定時点における、 j 番目の参加者の TSE である。同様に、 X_{ij} は、 i 週目の測定時点における、 j 番目の参加者の SSE 得点である。また、 v_{ij} は、誤差を表している。従って、レベル 1 の式 (1) は、TSE 得点に対する、SSE 得点の影響を検討するための式である。ここで、 β_{0j} は切片であり、 β_{1j} は回帰係数である。さらに、レベル 2 の式 (2) において、切片の β_{0j} には参加者全体に共通する固定効果 γ_{00} と個人差を表すランダム効果 v_{0j} を仮定し、同様に回帰係数 β_{1j} にも、固定効果 γ_{10} と、ランダム効果 v_{1j} を仮定している。すなわち、SSE 得点の回帰係数 β_{1j} において、固定効果 γ_{10} が有意であることが認められれば、SSE 得点と TSE 得点の間に、正または負の関連が認められることになる。unconditional model において、SSE 得点のランダム効果が認められた場合には、個人差を説明する要因として、エピソード変数の調整効果を検討することとした。

HLM において、unconditional model を検討した結果、SSE 得点の固定効果 γ_{10} が、有意になった ($\gamma_{10} = .44, p < .05$)。また、SSE 得点の固定効果の個人間の分散も有意となった ($v_{1j} = .11, p < .05$)。つまり、SSE 得点が TSE 得点には正の関連があることが示され、両者の関連には個人差があることも示された。SSE 得点のランダム効果が認められたため、エピソード変数による調整効果の検討をした。

TSE と SSE の個人間における関連

次に、上記のエピソード変数なしモデルの分析で示された、個人内の TSE 得点と SSE 得点との関連の個人差を説明するために、レベル 2 に参加者の失敗経験または対人磨耗経験の有無というエピソード変数を投入したモデルを検討する。このモデルのレベル 1 は、エピソード変数なしモデルの式 (1) と同じで、レベル 2 のみを次のように変更する。

<レベル 2 (個人間レベル)>

$$\beta_{0j} = \gamma_{00} + \gamma_{01}W_j + v_{0j}$$

$$\beta_{1j} = \gamma_{10} + \gamma_{11}W_j + v_{1j}$$

1 つめの式は、エピソード変数なしモデルの分析結果で示された切片 β_{0j} の個人間における分散を、失敗経験の有無または対人磨耗経験の有無によって説明するための式である。また、2 つめの式は、エピソード変数なしモデルの分析結果で示された回帰係数 β_{1j} の個人間の分散を、失敗経験または対人磨耗経験の有無によって説明するための式である。よって、 W_j は失敗経験、もしくは対人磨耗経験の有無を表しており、 $W_j = 0$ は失敗経験または対人磨耗経験のない者、 $W_j = 1$ は失敗経験または対人磨耗経験のある者を示す。以上のモデルは、個人間の分散を、ある変数によって説明するモデルであるため、conditional model と呼ばれる。

TSE 得点を従属変数とし、このモデルを適用して分析を行った。まず、レベル 2 の変数に対人磨耗経験の有無を投入した結果、SSE 得点と TSE 得点との関連の個人差を説明するための、対人磨耗経験の有無の回帰係数 γ_{11} が有意となり ($\gamma_{11} = .28, p < .05$)、SSE 得点と TSE 得点との関連の分散は有意なままであったが減少した ($v_{1j} = .10, p < .05$)。

同様に、レベル 2 変数に失敗経験の有無を投入した結果、SSE 得点と TSE 得点との関連の個人差を説明するための、失敗経験の有無の回帰係数 γ_{11} が有意傾向を示し ($\gamma_{11} = -.19, p < .10$)。SSE 得点と TSE 得点との関連の分散 v_{1j} は、値は有意なままであったが減少した ($v_{1j} = .10, p < .05$)。

考 察

本研究の目的は、TSEとSSEの関連を明らかにすること、TSEとSSEの関連に影響を及ぼす要因について検討することであった。そこで、日常的な出来事である【対人摩擦】経験と【失敗経験】を取り上げて、階層線形モデルによる検討を行った。以下では、この2つの出来事に関する結果についてそれぞれ考察し、最後に本研究の意義と限界について述べる。

TSEとSSEとの関連

unconditional model の結果から、TSE 得点は SSE 得点と関連をすることが示された。これより、TSE 得点は、SSE 得点による影響によって、変動する可能性が示唆された。つまり、自分に対して感じる全体的な評価であり、比較的安定している TSE が、対人文脈や日常生活の出来事によって揺れ動く SSE との関連によって変動している可能性が示唆された。これより、仮説 1 が支持された。

TSE と SSE との関連について、Brown & Marshall (2006) は、「評価的フィードバックは TSE に影響を与える」というボトム・アップモデルを提唱している。竹田・川本・渡邊・サトウ (2011) は、このボトム・アップモデルを「評価的フィードバックの影響を受けて SSE は形成されるが、形成される SSE の影響を受けて TSE の高低は変化しうる」と再定義し、文献検討を行った。その結果、明確に SSE と TSE の関係性について論じている研究は少なく、ボトム・アップモデルを実証的に検討する研究が見られなかったと指摘している。ただし、近年にみられるソシオメーター理論 (Leary et al., 1995) の台頭により、TSE を以前よりも可変性の高い変数として捉えられる兆しがあると指摘している。本研究においても、竹田他 (2011) が考察しているように、SSE が TSE へ影響を及ぼし、変動した可能性が考えられる。

TSE と SSE の関連に影響を及ぼす要因—対人摩擦—

conditional model の結果から、SSE 得点と TSE 得点の関連は、【対人摩擦】経験によって強める可能性が示唆された。つまり、個人によって、SSE と TSE の関連は異なるが、その関連に影響を及ぼす要因に【対人摩擦】経験が関わっているということが示唆された。これより、仮説 2 が支持された。

本研究において、対人摩擦による対人ストレスイベントは、SSE を変動させるだけではなく、SSE が比較的安定している TSE との関連に影響を及ぼすほどの、出来事である可能性が示唆された。ソシオメーター理論 (Leary et al., 1995) より、【対人摩擦】経験は、社会・集団的な動物である人間にとって非常に脅威的であると考えられる。そのため、対人摩擦経験のある者は、SSE が変動しやすいだけではなく、SSE の変動に伴って「私は価値ある人間である」という TSE の変動にも関連した可能性が考えられる。そのため、本研究の結果のように SSE と TSE の関連が【対人摩擦】によって強まったと考えられる。

TSE と SSE の関連に影響を及ぼす要因—失敗経験—

conditional model の結果から、SSE 得点と TSE 得点の関連は、【失敗経験】によって弱めてしまう可能性が示唆された。つまり、個人によって、SSE と TSE の関連は異なるが、その関連に影響を及ぼす要因に【失

敗経験】経験が関わっているということが示唆された。これより、仮説 3 が支持された。

失敗経験は、個人内の出来事であり、対人摩擦と比較して対人的な文脈での出来事ではないと考えられる。そのため、SSE が変動しても、TSE の変動には関連しない可能性が考えられる。すなわち、ソシオメーター理論 (Leary et al., 1995) からみて、自尊感情は他者からの受容の測定器であることを考えると、対人的なストレスイベントでは特性的な自尊感情も変動しやすいと考えられるが、課題のミスやヒューマンエラーなどの失敗経験は、あくまで個人内の出来事であり、自己の全体的な評価を揺るがすほどの変動を生じない可能性が示唆された。そのため、本研究の結果のように SSE と TSE の関連が【失敗経験】によって弱まったと考えられる。

本研究の意義と限界

本研究では、7 日間の縦断調査による TSE と SSE の関連、TSE と SSE の関連に影響を及ぼす要因に着目して検討を行った。検討の結果、TSE と SSE の関連に加え、【対人摩擦】経験と【失敗経験】が TSE と SSE の関連の個人差に影響を及ぼす可能性が示唆された。このことは、特性的であり、比較的安定していると考えられている TSE は、対人摩擦や失敗経験によって揺れ動く SSE の影響によって変動することを示唆した。これより、日常の対人ストレスイベントが、SSE と TSE の関連に影響を与える要因であるという研究的示唆が得られた。本研究の示唆によって、抑うつ感や、無気力感など、精神的健康との関連においても非常に重要な示唆であるといえる。

また、比較的新しい手法である階層的線形モデルを用いた検討によって、TSE と SSE の個人内レベルと個人間レベルをより詳細に検討することができた。これにより、階層的線形モデルによる TSE と SSE の検討を行った点は、学術的研究の促進という意味で重要な意義を持つと考えられる。

なお、本研究の限界としては、まず、日常の出来事がどれくらい参加者にとってインパクトのある出来事であったのか不明な点である。日常の出来事について「自分の気持ちに何か変化や影響を感じる事が出来た出来事」を記述させたが、この出来事が自分にとってどれくらい重要であり、脅威であったのかについて評価させなかった。出来事のインパクトを評価させることによって、より一層自尊感情と日常の出来事との関連を考察できたと考えられる。

次に、本研究ではポジティブな影響をもたらすと考えられるポジティブイベントに焦点を当てて検討を行わなかった点である。本研究では、ネガティブイベントが TSE と SSE の関連に影響をもたらすと予想し、検討を行った。その結果、対人関係による疲労である対人摩擦や、自己価値が随伴する経験である失敗経験が TSE と SSE の関連に影響を及ぼす要因であることが示唆された。ネガティブイベントに焦点を当てて検討を行ったことにより、日常の出来事の中でも特にどのようなネガティブな出来事が TSE と SSE の関連に影響を及ぼすのかを明らかにした点で、意義のある示唆だと考えられる。しかし、その一方で、ポジティブイベントにも視野を広げて検討を行うことによって、より多くの示唆が得られた可能性があると考えられる。今後の研究では、想定される要因を再吟味し、検討を行っていく必要がある。

引用文献

阿部美帆 (2009). 自尊感情の高さおよび変動性の 2 側面と出来事経験との関連 日本パーソナリティ心理学会大論文集, 18, 118-119

- 阿部美帆・今野裕之 (2007). 状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究, **16**, 36-46.
- Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. D. (1978). Learned helplessness in humans : Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 49-74.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Bulletin*, **111**, 497-529.
- Brown, J. D., & Marshall, M. A. (2006). The three faces of self-esteem. In M. Kerins (Ed.), *Self-esteem : Issues and answers* (pp.4-9). New York: Psychology Press.
- Dweck, C. S. (1986). Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*, **41**, 1040-1048.
- Dweck, C. S., & Reppucci, N. D. (1973). Learned helplessness and reinforcement responsibility in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, **25**, 109-116.
- 遠藤辰雄 (1992) セルフ・エスティームの定義と展望 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋 (編) セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探究— ナカニシ出版 31-49.
- 遠藤由美 (1999). 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, **39**(2), 150-167.
- 榎本博明・稲本和子・松田信樹・梅垣武 (2001). 自尊感情に関する概念検討 大阪大学教育学年報, **6**, 141-149.
- 原田宗忠 (2008). 青年期における自尊感情の揺れと自己概念との関係 教育心理学研究, **56**, 330-340.
- 橋本 剛 (1997). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, **13**, 64-75.
- 橋本 剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, **48**, 94-102.
- 市村美帆 (2012). 自尊感情の変動性の測定手法に関する検討 パーソナリティ研究, **20**, 204-216.
- 池田 浩・三沢 良 (2012). 失敗に対する価値観の構造—失敗観尺度の開発— 教育心理学研究, **60**, 367-379.
- 石田 弓・前田健一・品川由佳・児玉憲一・岡本祐子・松下姫歌・大塚泰正 (2008). ストレス脆弱性克服に挑む教育科学—大学生におけるストレス脆弱性と自尊感情との関連— 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **7**, 79-85.
- Jones, S. C. (1973). Self-and interpersonal evaluations: Esteem theories versus consistency theories. *Psychological Bulletin*, **79**, 185-199.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法—創造性開発のために 中央新書.
- Kowalski, R. M. & Leary, M. R. (1999). *The Social Psychology of Emotional and Behavioral Problems : Interfaces of Social and Clinical Psychology : American Psychology Association* (ロビン・M・コワルスキ, マーク・R・リアリー 安藤清志訳・丹野義彦訳 (2001). 社会心理学の進歩 —実りあるインターフェイスをめざして 北大路書房)
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. J., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 518-530.
- 中間玲子・小塩真司 (2007). 自尊感情の変動性における日常の出来事と自己の問題 福島大学研究年報, **3**, 1-10.

- 岡田 涼 (2012). 大学生における日常の受容・拒否経験と自尊心, 攻撃性との関連 パーソナリティ研究, **21**, 84-86.
- 大谷和夫・中谷素之 (2011). 学業における自己価値の随伴性が内発的動機付け低下に及ぼす影響プロセス—状態的自尊感情と失敗場面の感情を媒介として パーソナリティ研究, **19**, 206-216.
- 李 可奈・山内弘継 (2000). 失敗経験がもたらす自尊感情への影響 日本教育心理学会総会発表論文集, **42**, 458.
- Rosenberg, M. (1965). Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ: *Princeton University Press*.
- Seligman, M. E.P. (1972). Learning through failure : The strategy of small losses. In B. M. Staw & L. L. Cummings (Eds.), *Research in organizational behavior*. Vol. 14 (pp.231-266). Greenwich, CT : JAI Press.
- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991). A terror management theory of social behavior: The psychological function of self-esteem and cultural worldviews. *Advances in Experimental Social Psychology*, **24**, 93-159.
- 菅原健介 (1998). シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極傾向 性格心理学研究, **7**, 22-32.
- 竹田 剛・川本静香・渡邊卓也・サトウタツヤ (2011). 研究アプローチに基づいた状態・特性自尊感情概念の再考 (3) —ボトム・アップモデルの検討— 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, **20**, 70.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.